

信徒講座：宣教の使命に生きる②

Ⅲ. 初代教会の宣教実践

1. 聖霊のバプテスマを求めた弟子達:主の遺命と約束に従い祈り求めた (使徒 1:4, 8, 13, 14)
2. 弟子達の伝道:聖霊のバプテスマを受け(使徒 2:1~4)力強い伝道を始めた。多くが救われ、教会が形成された (使徒 2:41、47、6:7)。
3. エルサレム教会の保守性:当初はユダヤ人中心で地理的にも文化的にも閉鎖的であった。しかし、迫害を通してその閉鎖性が解かれた (使徒 8:1, 4~8、10:34, 35)。
4. 救済論的論争(使徒 15:1~3):「異邦人」がユダヤ教に帰依する事なく神の民に加えられる事が承認された。

Ⅳ. パウロの捉え方と実践

1. サウロの回心と召命:サウロの回心を齎した一つの要因はステパノの革命的な説教と考えられる。更にサウロは、キリストの名を異邦人に齎す「宣教師」として名指された(使徒 9:15, 22:21, 26:17, ガラテヤ 1:15, 16, 2:7-10, ローマ 15:16)。更に彼は、「地の果てに至るまで」の宣教のヴィジョンを持っていた (ローマ 15:28)。
2. パウロの宣教実践:パウロは訪れた(ユダヤの外での)町々で、先ずユダヤ人会堂に行き、ユダヤ人礼拝者及びそこにいた異邦人に福音を伝えた。多くのユダヤ人が福音を拒んだ事が彼を異邦人伝道に向かわせた(使徒 13:46)。正に彼は「異邦人伝道に」特化して遣わされた (使徒 21:17-21)。ガラテヤ書等で強調している「恵みによる救い」の神学は、律法主義からの脱却を示している (ローマ 9-11 章、エペソ 2-3 章)
3. パウロの宣教戦略:彼はその宣教旅行において、①主要街道を利用し、それに沿って建てられていた大都市を拠点とした(ピリピ、テサロニケ、アテネ、コリント、エペソ等)。大都市に拠点を造り、それを発信基地として全州に福音を伝えるという展望であった(使徒 18:10)、②「本部との緊密な連絡」も怠らなかった (アンテオケ、エルサレム教会を母教会と位置付けた。③異邦人の使徒(ガラ 2:8、ローマ 11:13)であったが、「ユダヤ人を始め」(ローマ 1:16)という原則に従った (使徒 13:15)。④彼は関心を示す人々に説教した。ユダヤ人が反抗的態度を示した場合、パウロは意識的に「異邦人に向かう」事を宣言した(使徒 13:46)。⑤彼は教会設立まで必要な期間滞在した。⑥チーム伝道を大切にした。大勢の宣教師の司令官的立場で同労者の数を増し加えた。⑦パウロは「全ての人に、全ての者となった。」メッセージの内容については譲らなかったが、それ以外の点では、融通性を示した。ユダヤ人にはユダヤ人の様になり、異邦人には異邦人の様になった。それは、何とかして幾人かでも救う為であった(1 コリント 9:19-13、8:13)。

付記：トマスによるインド宣教：新約外典の「トマス行伝」によれば、彼は南インドで福音を伝え、そして殉教した。その名を継いだ「マートマ教会」がケララ州に存在している。